

司式: 大塚 明子  
奏楽: 吉田千鶴子

前奏: 「天にまします、我らの父よ」(D. ブクステフーデ)

招詞: あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。(使 1:8)

讃美歌 204「よろこびの日よ」

交読詩編 104. 24-35

- 24 主よ、御業はいかにおびたしいことか。あなたはすべてを知恵によって成し遂げられた。地はお造りになったものに満ちている。
- 25 同じように、海も大きく豊かで/その中を動きまわる大小の生き物は数知れない。
- 26 舟がそこを行き交い/お造りになったレビヤタンもそこに戯れる。
- 27 彼らはすべて、あなたに望みを置き/ときに応じて食べ物をくださるのを待っている。
- 28 あなたがお与えになるものを彼らは集め/御手を開かれれば彼らは良い物に満ち足りる。
- 29 御顔を隠されれば彼らは恐れ/息吹を取り上げられれば彼らは息絶え/元の塵に戻る。
- 30 あなたは御自分の息を送って彼らを創造し/地の面を新たにされる。
- 31 どうか、主の栄光がとこしえに続くように。主が御自分の業を喜び祝福されるように。
- 32 主が地を見渡されれば地は震え/山に触れられれば山は煙を上げる。
- 33 命ある限り、わたしは主に向かって歌い/長らえる限り、わたしの神にほめ歌をうたおう。
- 34 どうか、わたしの歌が御心にかなうように。わたしは主によって喜び祝う。
- 35 どうか、罪ある者がこの地からすべてうせ/主に逆らう者がもはや跡を絶つように。わたしの魂よ、主をたたえよ。ハレルヤ。

朗読聖書①イザヤ書 43. 21-28

- 21 わたしはこの民をわたしのために造った。彼らはわたしの栄誉を語らねばならない。
- 22 しかし、ヤコブよ、あなたはわたしを呼ばず/イスラエルよ、あなたはわたしを重荷とした。
- 23 あなたは羊をわたしへの焼き尽くす献げ物とせず/いけにえをもってわたしを敬おうとしなかった。わたしは穀物の献げ物のために/あなたを苦しめたことはない。乳香のために重荷を負わせたこともない。
- 24 あなたは香水をわたしのために買おうと/銀を量ることもせず/いけにえの脂肪をもって/わたしを飽き足らせようとしなかった。むしろ、あなたの罪のためにわたしを苦しめ/あなたの悪のために、わたしに重荷を負わせた。
- 25 わたし、このわたしは、わたし自身のために/あなたの背きの罪をぬぐい/あなたの罪を思い出さないことにする。
- 26 わたしに思い出させるならば/共に裁きに臨まなければならない。申し立てて、自

分の正しさを立証してみよ。

- 27 あなたの始祖は罪を犯し/あなたを導く者らもわたしに背いた。
- 28 それゆえ、わたしは聖所の司らを汚し/ヤコブを絶滅に、イスラエルを汚辱にまかせた。

朗読聖書②マルコによる福音書 2:1-12

◆中風の人をいやす

- 01 数日後、イエスが再びカファルナウムに来られると、家におられることが知れ渡り、
- 02 大勢の人が集まったので、戸口の辺りまですきまもないほどになった。イエスが御言葉を語っておられると、
- 03 四人の男が中風の人を運んで来た。
- 04 しかし、群衆に阻まれて、イエスのもとに連れて行くことができなかったで、イエスがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした。
- 05 イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われた。
- 06 ところが、そこに律法学者が数人座っていて、心の中であれこれと考えた。
- 07 「この人は、なぜこういうことを口にするのか。神を冒瀆している。神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」
- 08 イエスは、彼らが心の中で考えていることを、御自分の霊の力ですぐに知って言われた。「なぜ、そんな考えを心に抱くのか。」
- 09 中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。
- 10 人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に言われた。
- 11 「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい。」
- 12 その人は起き上がり、すぐに床を担いで、皆の見える前を出て行った。人々は皆驚き、「このようなことは、今まで見たことがない」と言って、神を賛美した。

### 祈祷

主イエス・キリストの父なる神さま。聖霊降臨節第 15 主日の朝も、一人ひとりの名を呼んで教会へと導き、またライブ配信を通して、尊い聖名を賛美し、御言葉を戴き、共に祈りを合わせる礼拝に集めてくださいました。この恵みを心より感謝申し上げます。過ぐる週も、私たちは御言葉に聞きつつ日々を過ごそうと心がけつつも、思いとは裏腹に世の中での為すべき業に忙殺され、自らの思いのままに日を過し、祈ること少なく、愛の業に乏しく、眩くことの多い日々であったことを顧み、神さまの赦しを希います。そのような心弱き者をあなたは見捨てることなく、今日も御許に呼び集め、悔い改めの機会を与えてくださいました。心より感謝申し上げます。

昨年引き続き、今年も猛暑の夏となりました。日本だけではなく、世界各地で起こっている洪水、暴風、旱魃、山火事などの情報に接する度に、地球温暖化の原因が人間の自己中心的な欲望によるのではないかと心の痛む日々を過ごしております。神さまが天地創造の時に“甚だよかつた”とされた世界を、この数 100 年の内に、“科学の進歩”という美名の

下、私たち人間は、自らの果てしない欲望を満足させるために、地球規模での競争を繰り広げ、資源を過剰に消費し、自然を破壊し続けてしまったように感じます。そのような“自分さえ良ければ…”という考えが罷り通る世界の中で、力弱く、知恵に乏しい私たちは、どのような生き方を選びとっていけるのでしょうか。神さまが喜ばれる生き方を模索し、誰もが心豊かに平和に過ごせる社会へと近づくことができるように、私たちを導いてください。

ウクライナやロシア、パレスチナのガザ地区をはじめ、世界の各地で弱い立場にある多くの人々が命や平和な生活を脅かされています。また、平和に見える日本にあっても、“有事に備えて”という名目で人々が心豊かに暮らしていた島々にミサイルが配備されるようになりました。「剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。(イザ2.4)」という世界はいつになったら実現できるのでしょうか。自らの保身のためや、また自らの富を増やす為に戦いを続けている国々の為政者を、あなたの御言葉をもって戒め、神さまの御支配の力を彼らに知らしめてください。そして、世界中の人々が日々の生活を安心して穏やかに過ごせるような社会が実現しますようにと祈ります。小さな、小さな力しかない私たちが、平和を造り出す器として、祈りを献げ続けることができますように用いてください。

この夏の猛暑の中で、外出を控えて友との交わりの機会も少なくなり、孤独を感じている高齢の方々をはじめ、心身の不調によって病床にある方々、生きることに困難を感じている方々、愛する家族の介護に時間を費やし、疲れを覚えている方々の上に、神さまの慰めと癒し、そして御支えが豊かに注がれますようにと祈ります。また、様々な事情により教会から離れている方々が、再び共に礼拝を守れる日が訪れますように神さまの力強い導きを切に祈ります。

100周年から1年が過ぎ、新たな100年に向かって歩み始めている信濃町教会が、これまでの伝統から多くを学びながらも、今この社会から必要とされる教会として、どのような方向へと向かうことを神さまは“善し”とされるのでしょうか。この秋に予定されている修養会を通して、実りある話し合いが行われますよう、準備を進めている委員の方々だけでなく、教会一人ひとりが真摯に向き合っていくことができますようお導きください。

本日の説教者を感謝致します。笠原先生の上に御霊が豊かに注がれますように。また聞く私たちは心の糧を戴いて、この週も愛を以て隣人に仕えつつ過ごして行くことができますよう導いてください。

これらの祈りを、尊き主イエス・キリストの聖名によって御前にお献げ致します。アーメン。

讚美歌 425「こすずめも、くじらも」

講壇「我らの罪を赦したまえ」

笠原義久

“ただ、神の赦しによって人は生きる根拠と力とを与えられる。”これが聖書の変わることのない主張です。先程、お読み頂いた聖書箇所『マルコによる

福音書』も、その事実を記しています。

主イエスの前に運び込まれたのは中風を病む者でした。中風というのは脳出血などによる半身の不随、あるいは麻痺するなどのそういう病気です。イエスが相対した彼は、まず病める者であった。病の故の痛みや不安や焦りの中で、何とか治って、そのような状態から抜け出したいと、そのように願っていたことでしょう。しかしどうにもできない。自分が生きているということを悍ましく思うことも無くはなかったことでしょう。彼は中風でした。ですから、人々が彼を主イエスのもとに運んで来たところから、彼は足腰の利かない自分の癒しを願っても、自分では歩いて行けないという状態でした。

私たちはこの中風を病む者に、根本的には、ただ助けの与えられるのを待つ以外にない私たち人間の姿を見ることができます。“人間はそんな無力でだらしない、そういう者ではない”と、そういうふうに言うかもしれませんが。“人間はもっと輝きを持った自律的、責任的な存在だ”と、そのように言うかもしれない。しかし、そのような存在の真の深みにおける輝き、鍍金ではない本物の輝きは、むしろ、その生き方が破綻し、挫折を経験した無力さの中で、なお謙虚に真の生き様を求める者だけが持ち得るのではないのでしょうか。ですから、“人間の真の輝きというのは、本当に自らの無力さを知る所にある”とそのように言ってもいいかも知れません。

私たちは神の御前にあつては、どんなに健康で力に満ちているように見えても、この中風を病む者のように、自分では自分の癒しの為に何一つできない、そういう者として置かれています。これが私たちの根本の状態です。神のために献げるべき自分の生というものを、わがままや己の欲の為に浪費し、怠惰のうちに神の時を盗んでいるような日々、神に帰すべき栄光を自分に求めている者、これが神に対する負債者、負い目を負っている者の当然に受けるべき困窮であり、破産のような状態に他なりません。そして、この破産状態、そして負っているこの負債というものは、“あの1万タラントの負債を負っている負債者(マタ18.24)”のように、決して返済できるそういう額のものではありません。

「我らの罪を赦し給え」(マタ6.12)、元の言葉(ἄφεσις ἡμῖν τὰ ὀφειλήματα <アフエシ(赦せ)・ヘーミン(私の)・タ(冠詞)・オフェイレ・マタ(負い目)>)では、直訳すれば「負債を放免せよ」、『主の祈り』の5番目の祈りを私たちが祈らざるを得ない所以であります。私たちは、この5番目の祈り、『主の祈り』の五番目の祈りを、根本的には破産状態にある者としてしか、あの中風を病む者としてしか、ただ助けを求める以外に何もし得ない者としてしか、この祈りを祈ることはできないのではないのでしょうか。宗教改革者ルターはこのように言います。“『我らの罪を赦し給え。』これは私たちの哀れな惨めな生活に関する祈りである”と。

さて、主イエスは、運ばれてきた中風の者に向かって、こう宣告します。「子よ、あなたの罪は赦される」と。そして、「赦し」の見える形として、彼を癒し、立たせ、家に帰させます。彼を、病から、生きることの破れや不安や焦りから解き放ち、自分で立って、自分で考え、自分で決断し、自分で歩く、そういう自立の人へと回復させた。そしてその彼を家へと帰す。即ち、人間の交わりの中へ、隣人の中へと帰したのです。この中

風を病んでいた者は、今や、「赦し」によって新たにされ、人間らしく生きる根拠と力と与えられたというのです。

この事実は、ただあの中風の者に起こっただけではなくして、根本のところ、先ほど申し上げたような破産状態にある私たちにも、定かに見えていないとしても、この事実、ここで起こっていることは確かに起こっているのだと、私たちの上でも確かに起こっているのだということ、を聖書は告げています。そして実際この事実は、私たちのすべての隣人、この世、そしてこの時代の上に起こっていると、そのように聖書は告げているのではないのでしょうか。

神がイエス・キリストによって私たちに与えてくださる赦しは、率直に言って『安堵』の出来事です。中風の者の癒しに見るように、“あなたは生きてよしい。あなたは生きることができる、あなたの存在の根拠と力とは確かである”と、そのように告げられる『安堵』の出来事。

『安堵』という言葉は、歴史的には、日本において、“武士や寺の所領に対して与えられた法的な確認、あるいは保障だ”という意味を元々持っているようでありませけれども、聖書において「赦し」というのは、“人間と世界に対し、神が、人間と世界がその本来の姿で生き存続し、神の国を待ち望んでよしいと宣告される。その宣告、その宣言を根拠づけ保証する、そういう出来事。そういう意味で神の赦しというのは、私たちに對する『安堵』の出来事である”、そのように言うてよいでしょう。

先ほどの中風を病む者、彼はまず罪の赦しの宣告を受けました。彼はそこで根本的な『安堵』を与えられました。彼が自覚したかどうかは別として、そこでは最早彼が中風を病みつつ生きるのか、治って生きるのか、ということは根本の問題ではなくなったのです。自分が苦しんでいるこの病気も、悩んでいる性格的な欠けも、生まれも育ちも、社会的な制約も、あるいは仕事上の失敗も成功も、自分の罪も、この世の罪も、サタン的な勢いも、その他どのようなものも、最早自分を『安堵』から、あの神の“然り”、あの“よしい”という宣言から元に戻すことはできない。『安堵』を与えてくださったイエス・キリストにある神から引き離すことはできない。そして、この事実に事実を知り、そして、この事実に生かされる。これがこの“癒される”ということではないのでしょうか。使徒パウロは次のように語っています。

<sup>35</sup> だが、キリストの愛から、—即ち、愛ゆえの赦しから—わたしを引離すことができます。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。…  
<sup>38</sup> わたしは確信しています。死も、命も天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、<sup>39</sup> 高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引離すことはできないのです。」

『ローマの信徒への手紙』8章でパウロが歌っているこの『勝利の歌』、これが聖書に告げられている「赦し」の根本の意味と、そして現実であります。

さて、聖書で、殊に福音書で「赦し」と言うとき、元のギリシャ語ではこの「赦し」ということについて、この元のギリシャ語は二つの言葉で言い表わされています。一つは「開放する、放免する」(ἀφίημι)とい

う意味を持つ言葉。もう一つは、「責任などは問わない」、乃至、「帳簿上の借金の記載を棒で線を引いて消す」(καρτῶν ἀχαιζομαι) (?) という意味を持つ、二つの言葉であります。「赦し」というのは、そういう内容を持つ二つの言葉の内容を持つ事柄です。即ち、“私たちの負債、即ち、罪が棒を引いて帳消しにされ、私がおの足枷から解放される”ということです。そしてここに引かれた棒線が、他ならぬイエス・キリストご自身だと、そのように聖書は告げています。私たちは、主イエスによる、この中風の者の赦しと癒しの記事の背後に、明らかに主の十字架を見ることができるのです。

中風の者は、主イエスの罪の赦しの宣告によって安堵を得ました。先ほども言いましたけれども、そこでは最早病が癒されるかどうかは根本の問題ではなくなっています。けれども主イエスは、その病をも尚、癒してくださいました。そしてそれは、“人の子が地上で罪を赦す権威をもってすることを知らせるためだ”と、そのように記されています。今や、“主イエスによる赦しは、赦しという教えは知っているけれども、赦しの実事そのものは知らない”、そういう者たちに、赦しの事実を目に見える形で示されるのです。

ここで注意すべきは、“主イエスの罪の赦しは、決して、病の癒し無しには示されなかった”ということです。或る聖書注解者が言うように、“もし我々が主要なことは罪の赦しであって、体の癒しは二次的な事柄だというふうにごく読むとすれば、我々はこの箇所を読み誤ったことになるであろう。”そのようにある聖書注解者は言っています。その通りだと思います。

ここに見る「赦し」、即ち「安堵」の現実、この病む者を病から解き放ち、本来の健康な状態に回復するということでした。罪の赦しは彼に対する“生きてよしい、生きることができる”ということの根拠と力として告知されます。ここでの「赦し」は、彼を食い尽そうと取り付き、彼を滅ぼそうとして襲ってくる様々な闇の力を打ち砕き、その拘束から解き放つことです。そして、人間として本来立つべきところ、あるべきありかたへと正してくださることです。その本来立つべきところというのは、端的には、“自分とこの世界とを赦しのうちに存在させてくださる主イエスに自らの根拠を置く”ということ。即ち、“私たちの一齊がキリストのものだという信仰の中に生きる”こと。“私の生活は礼拝者としての生活以外ではないのだという確認を繰り返す”こと。そして、“キリストが与えてくださる喜びや望みや力において私たちが立たされている、この現実に私たちが目を開く”ということです。

私たちの本来のあるべきあり方というふうに申しましたけれども、それはどのような在り方なのでしょう。それは、“あの赦しを受けた者として、解き放ちを受けた者として、解き放ちの主にならば、隣人とこの世にその主を指し示しつつ、また、その主の御業に与る者として、自らも赦しの主に倣って生きる”ということ、そのことではないのでしょうか。

『主の祈り』で私たちが祈っているように、“我等に罪を犯す者を我らが赦す如く、我らの罪をも赦し給え。”つまり、“神による私たちの赦し”というものと“私たちの隣人に対する赦し”というものは切り離すことができない関係にあります。この『主の祈り』は、“神の赦しを受けつつ、私たちが隣人を赦さないことがないように”という、そういう祈りです。私たちは主イエスによる癒しを伴う罪の赦しを一度決定的に、そしてまた繰り返し与えられてい

るということを知り、またそのことを知るゆえに、その「赦しが、繰り返し与えられるように」と祈る者たちです。そうであれば、私たちはまた、「我らに罪を犯す者、負債ある者を赦すことができるように」という祈りと、そしてその働きが求められています。

しかし、「我らに負債ある者を、我らが赦す」、これはいったい、どのような事なのでしょうか。「我らの赦し」というのは一体なんなのでしょうか。

私たちには主イエスが与えてくださったのと同じ質を持つ「赦し」を為すことは私たちにはできません。「罪を赦すことのできる方、救い主はただ一人主キリスト以外にはない。」私たちに求められている隣人に対する赦しというのは、ただ主イエスの私たちにに対する赦しの反映にしか過ぎないのです。私たちにに対する赦し、また、彼、私たち以外の者に対する彼に対する赦し、それはすでに主イエスにおいて決定的な形で起こっているのです。そして、この信仰の認識、そういう認識が私たち、もうすでに私に対する赦しも、そしてそこに居る彼に対する赦しも、イエスにおいて決定的にもう起こっているのだと。この信仰の認識が、私たちが「赦し」と言う場合の基礎となっています。

“キリストは、その兄弟のためにも死んでくださったのです。” 私たちの隣人、その誰からもまた主の赦しの中にある者、その赦しが彼の上に形をとるように労するということが、私たちの赦し、私たちがその彼を赦すという、そういうことはないでしょうか。

私たちに求められている「赦し」というのは、「互いに赦され、生かされている者同士として相手を見、相手を生かす道を考える」、端的にはそういうことでしょう。「赦し」は、私たちにとって、あの中風の者にとってそうであったように、端的に、喜びの出来事です。私たちの「赦し」というのは、その喜びへの喜ばしい応答に他なりません。そのような他への赦しに労苦することにおいて、他者に対する赦しに励むということ、そのことにおいて、自らに与えられている「赦し」というものも、はっきりと見えてくるのではないのでしょうか。

それでは「我らに罪を犯す者、我らに負債ある者」というのはどういう者のことを言うのでしょうか。それは「私たちに面倒をかける者、私たちがトラブルに巻き込む者、私の手を必要とするそういう者」のことです。ここでの問題の所在は「トラブルがある」という事実よりは、自らをも含めて、「それを引き起こしている者にどのように対処するのか、その者にどのように向き合うのか」、ということの内にあるように思います。互いの過ちや不義、憎しみや排除、抹殺、そういう意志が増幅する中では、あるいは互い無関心や逃げが支配する中では、トラブルの泥沼化が起こるだけです。そういう中で、自らと他者の上に与えられている神の赦しが、自らと他者を本来の立場、あり方へと回復する、そういう赦しの形を取るように労することへと私たちが招かれているのではないのでしょうか。我らに罪を犯す者は、自らをも含めて至るところにいます。「そこで赦しを生きる」、それが、この祈りを祈る者の生き方です。

『主の祈り』は、世界のための教会の祈りです。我らの負債、罪の赦しを祈る、その祈りも、世界のための教会の祈りです。私たちが主によって既に赦され、また繰り返し赦されつつある者として、その赦しを自ら

の生活の中で、また、この世、この時代の中で生きるということ。その赦しの主を指し示すということ。これは確かに私たち自身のための祈りであると共に、世界のための私たちの祈りです。今日この世界がどれほど主イエスによる罪の赦しを必要としていることか。主イエスによる『安堵』、生きる根拠と力と方向とが与えられるということとをどれほど必要としていることか。私たち自身のことを考えても、教会のことを考えても、身近にある人々のことを考えても、また社会の成り行きを考えても、誰一人として、どれ一つとして「赦し」による解放と、新しい生とを必要としない者はありません。教会はこのようなこの世のために、『主の祈り』を祈り、祈る者として働く者の群れであるということ、そのことを忘れてはならないと、そのように思います。

主イエスは私たちに「子よ、あなたの罪は赦される。」そのように、この朝も語っておられます。そして、「起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」と、そのように命じ勧められます。私たちは、今、共に改めて、この罪の赦しの宣告と、そしてその赦しを生きるべく、私たちが遣わす派遣の御言葉を聞きたいと、そのように願う者であります。

お祈りします。

主よ、語りました言葉をあなたの聖霊の働きによって、生ける命の御言葉にしてください。この時間の中で御言葉が私たちすべてを慰め、勇気づけ、励まして下さること、そしてそのことが私たちの間に、近くや遠くのありとあらゆる場所に起こるよう、そのように切に祈り願います。

主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

#### 讃美歌 444「気づかせてください」

#### 献金・感謝・主の祈り(千住由美子)

主イエス・キリストの父なる御神さま、私たちを一週間お守りください、ここに集めて戴きましたことを感謝致します。

笠原先生の説教を伺い、私たちが私たち自身を、そしてまた教会の在り様を問い直し、罪を見つめ、このあなたに赦された安堵に充たされて在ること、そしてこれからも歩んで行くことができるということ、その確信を笠原先生から戴きました。どうぞ、あなたの安堵の中にあつて、その安堵を私たちだけで独占せずに、身近な人に、また世の中に、あなたの宣教のために仕えていくことができるようにさせてください。

ここに献げました物は、あなたが私たちに与えてくださったものの中の一部でございます。清めてあなたの御用のためにお使いください。

あなたが教えてくださいました『主の祈り』を祈り、また私たちの新たな歩みを始めさせてください…「主の祈り」アーメン。

派遣：讃美歌 89「共にいてください」

祝福：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の清き親しき交わりとが、とこしえに  
あるように。アーメン。

報告：(1)修養会案内、(2)次週避難訓練案内

後奏：「高きにあります神にのみ栄光あれ」(J. パッヘルベル)